

楽園の暇

-Eden's Cage-

Secondary reading book

R-18

イメージボード＋設定画＋おまけ小説＋あとがき

注意書き

- ◇こちらは同日発行小説「楽園の暇-Eder's Cage-」の副読本です。
- ◇本編のネタバレしありませんので、小説を先にご覧ください（推奨）。
- ◇イラストは全年齢（※軽度な性描写あり）ですが、おまけSSの一つに年齢制限（R・18）があります。
- ◇個人の妄想がビッグバンしています。
- ◇よろしければ、どうぞお楽しみください。

イメージボード

In the Cherry blossoms



「上手く喋れるかな。何が好きかな。僕を好きになつてくれるかな。
……僕の番を」
僕は、好きになれるかな。



「初めてで、上手いくのかな」
「何回だって、やればいいじゃない」

Rain of autumn leave



僕たちは、この花が枯れないとを知っている。

One side of Sunflowers

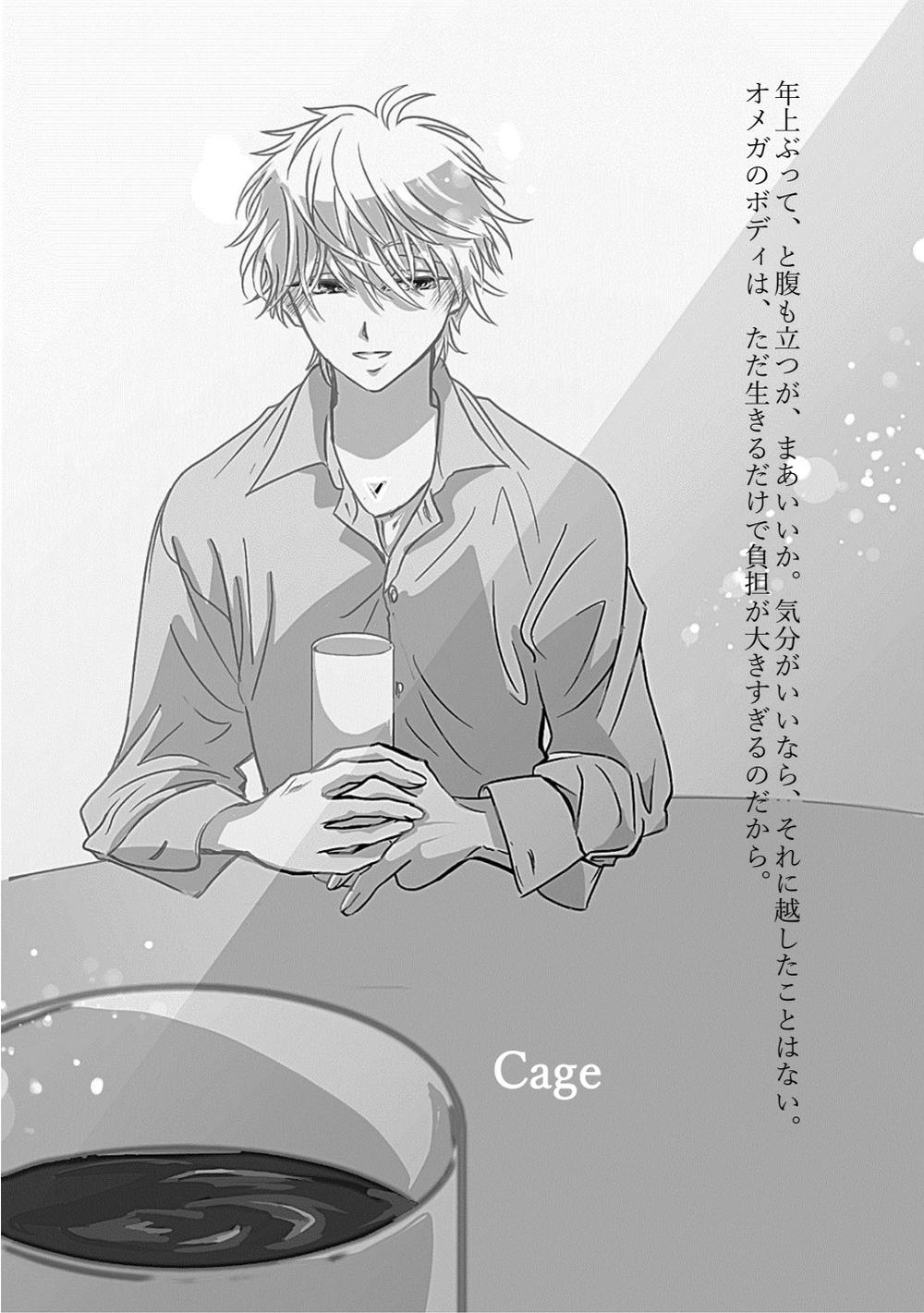


あるはずのものがない。
そうかもしれない。

でも、僕らにしかないものがあるんじゃないだろうか。

Above the Aurora

年上ぶって、と腹も立つが、まあいいか。気分がいいなら、それに越したことはない。
オメガのボディは、ただ生きるだけで負担が大きすぎるのだから。



Cage



……こんなに違うんだ。
僕らの時間は。

Cage



あの日も、
コーヒー
だったっけ。

Nest

「同じだなんて、嬉しくなって」
「同じ?」
「僕も、ちょっと怖かったから」



Nest



「一人で、来たことあるんだ？」

「ええ」

Paradise Lost



回収……、死んだ人は、戻ってこないって、
わかってるのにさ。



Paradise Lost

これが、「スキ、ってことなのかな、って。……うん。大好きだった。きれいで、やさしくて、ちょっと口が悪くてさ。…時々寂しそうに僕を見ていた。「おやすみなさい」が最後の言葉なんて、あんまりだ。

— 悔しいよ。僕が最初に出会いたかった。



Paradise Lost



「お前、そんなに雨が好きか？」

やがて、困惑を滲ませた声が静かに聞いた。僕は左眼に聞く。僕は雨が好きなのかな、と。

-rain.rain.rain.rain……

「雨っていうより」

-s-lain-e?-

「スレインが好きなんだ」

Beautiful
memories

心が決まる。言葉が決まる。
「君と、生きたいんだ」



[00]

登場人物設定画



α -IK-7

書いてくうちにスゲーいやつになっていって大好きになった。Nestの彼は本当に優しい。本人は無自覚だが世話好き。スレインと出会うまではロボットみたいな感じだった。素数は笑うところ。



Ω-ST-18

本編はエロ可愛い感じだけどそれは伊奈帆に惚れたから。出会う前はやさぐれていて、ノアのあちこちをうろついていた。伊奈帆の前では綺麗な自分でいたいし、伊奈帆といると自分にもこんな綺麗な部分があったんだって気付ける。危なっかしいところが可愛い。



α -IK-6

プロット時最初に彼のビデオの語りを書いた。スレインを兄のように慕っていた。ヒートの時には会えなくて退屈。ヒートの前後のフェロモンは「なんかいいにおいするな」って感じでピンときていない。スレインの元気がない時は、イタズラをしてよくどつかれていた。学校の美術室がお気に入り。



Ω-ST-17

12歳で前の伊奈帆がいなくなり、16歳で6帆と出会う。ヒートは13歳から。

6帆のことは割り切っているけど、年が近けりゃよかったなと思うこともあった。



左眼に神経汚染され 34 歳で病死。

界塚伊奈帆

(α -IK-0)



スレイン・トロイヤード

(Ω-ST-0)

伊奈帆と二人で過ごした5ヶ月間は幸せだった。

おまけ小説 (Recall) (God's prank)

スレインは眩暈に襲われ、コンパートメントの机に寄りかかった。脚が椅子を倒し、肘が机の上のカップや端末をなぎ倒す。薬に手を伸ばすが、指先が覚束なくて取り落としてしまう。床に落ちた抑制剤は、どこか見えないう所にいつてしまった。荒い呼吸に胸を押さえる。唾が糸を引くのが分かる。ぐらんぐらんと脳が揺れる。必死の思いで身体を起し、壁伝いに寝室へ向かう。

ヒートだ。今日からまた、地獄のような時間が始まる。

「……っ、くそ……っ」

こんなに遠いのか、と数歩の距離に心が折れそうになる。膝ががくがくとして、膝をつくと腰が抜けた。這いずって、ようやく寝台に手が届く。まず腕を。同じ方の脚を乗せ、反対側の手足で床を押し、ベッドの上に身体

を乗せる。服に擦れる部分がどこもかしくも痛痒い。身動きできずに、手足を丸めて蹲る。胴体の感覚が鋭敏すぎて、自分の腕が、脚が、手が、指が、ばらばらになってしまったような錯覚に陥る。

「伊奈帆……」

脳裏に浮かんだ幼い顔に首を振る。罪悪感に歯を食いしばる。こんな時に。

「はは……。違う、……。だろ」

わかっている。わかっているんだ。お前の番は僕のではない。それでも、あまりに似すぎているから。その目も、声も、僕を呼ぶ時僅かに下がる眉の形も。

『スレイン』

だからつい、勘違いしてしまいそうになる。

——運命の番だ、と。

「……なん、……。で」

でも、それは当たり前のことなんだ。僕らはすべて同じもの。



伊奈帆の番はスレインで、番は永遠に紡がれる。この箱庭で。僕らは同一の個体を、遙か彼方のエデンへ運ぶ遺伝子の乗り物。オリジナルの運命を途切れさせないことが役目。

僕は「繋ぎ」だ。

今の伊奈帆を、次のスレインに繋ぐのが僕の生まれた意味で、この箱庭で与えられた役割だ。

——僕には、運命は訪れない。

知っている。仕方がない。あの日決めた。逃げられないと知った日に。この生を全うすると。ヒートを一人で耐え抜くと。

「はあ、はあ、……っ」

パーカーのジッパーを引く手が縛れる。頭が痛い。呼吸が浅い。眩暈が酷い。視野が暗くて何も見えない。カラーに覆われた首が暴れる。求める。この身体を爪の先まで支配する。

子を宿せ、と。

「……なんで、いない、んだ。馬鹿……ッ」

数え切れないほど言い続けた恨み言を、今日もまた言ってしまう。

仰向けになり胸を弄る。自分しか触れたことのない肌は、性感帯に爪を立てて抓っても、思い通りに反応しない。乳首を扱き、脇腹に指を押し付ける。口の中を指でさわり、腿の間を揉みしだく。膝が開き、腰が浮く。まだ触ってもいないのに内側が痙攣を始める。じゅくじゅくとした内襲に押し出される腸液で後孔が湿る。

「うあ……っ、んあ、……あ！」

ベッドサイドの器具に手を伸ばす。上手く掴めなくて、一つ、二つと床へと落ちる。やつと掴んだ三つ目のデイルドを後孔にあてがう。

「ハア、ハア、……っ、う！」

すぐく大きくて硬い。手淫がなくても滴りが落ちるほど中は求めて濡れているのに、太い雁首が引っかかって入っていかない。

「ハアツ、ハアツ……！う……、ア！」
当たり前だ。ヒートは三ヶ月に一度。この
器官を使うのはその時だけなんだから。

「っ……く、うっ……！」

初めてのヒートを迎えた十三歳の時から。
いつだってこの時は、モノに犯される屈辱
と、番のいない喪失感にやり切れない。

「は、あ、……っ！げほっ、げほっ」

あまりに苦しくて咳き込む。痛くて、苦し
くて、吐き気がするほど気持ち悪い。それで
も、挿入を止められない。気が遠くなるほど
遠く感じるクレイドルが先端を求める。

「はあっ、はあっ……、ア……ッ！」

手と腰が中をかき混ぜ壁を擦る。位置を下
げた奥をつく度、快感が高まる。激しい挿挿
を繰り返し、粘ついた水音が大きくなる。膝
が震え、喉が反る。嘔んで欲しい。プロテク
ターで覆われたこのうなじを。僕にはそんな
相手はいない。そして、自分で自分を犯す両
手はそこを引っ掻くことすらできない。ヒ―

トに蹂躪されたあられもない姿で、嬌声を抑
えられずに一人でのたうつ時はいつも思う。

「伊奈帆……っ」

貴方がいたら良かったのに、って。

貴方の手が、どんな風に触れるのかとか。

貴方の肌は、どんな匂いがするんだろうと
か。

貴方の声は、余裕のない時どんな風に僕の
名前を呼ぶんだろうとか。

「く、あっ……！げほっ、ゲホッ……！は
あっ！はあ……っ！」

たとえエデンに降り立つ番が僕らでなかっ
たとしても。

「……っは、……っはあ……っ！……っ、い
な、ほ……っ！」

貴方と一つになれたなら、きつと幸せだっ
たらう、とか。

「んあ……っ！ああ……っ！……っ！」

目が熱い。身体が張り詰め、最奥を穿つ張
型に直腸がバグを起こして収縮する。

「あア……っ！——ッア……ア！」

愛液が腿を。涙が頬と耳裏を伝う。暴力に等しい快感。言葉も思考も全て消え、身体が誰かの道具みたいに重くなる。

「は、あ……、ウっ……ん！んあ……！」

オメガのヒートは、達してもすぐに次を求める。性器は弾力とぬめりを増し、僕の意志とは無関係に啞え込んだモノに愛撫を始める。そこから何も出てはこないのに。何も実りはしないのに。

これが七日続くんだ。それがあと九回。

耐え難い責苦だ。一人では。

涙が止まらない。目が痛い。いつもそう
だ。貴方のことを想うと。

足首を通したままのズボンのポケットの中を探る。肌身離さず持ち歩いている小さな球体。その虹彩の赤色を見る。

貴方の一部。貴方の形見。

こんなところに、貴方がいないのは知ってる。それでもこの眼は、鳥や雨の話の聞く時、僕が見ていた貴方の目なんだ。

かつて僕を映していた眼に口付ける。冷たくて硬い。舐めると何の味もしない。一度だけしか望まないのに、決して叶いはしないんだ。その時はもう過ぎ去ってしまったから。

「……伊奈帆」

それでも、考えてしまう。この身体を道具みたいに扱う相手が、貴方なら良かったのに、って。

——僕に似てる？

僕はお前に、何度も聞いたことがある。すごく小さい頃も、ついこの間も。お前が動けなくなつてすっかり参つてしまつてからも、十八回は聞いたはずだ。

僕に似てる？ 　　って

お前の返答は、細かいところは異なるが大筋は同じ。あまり似ていない、だった。それに無性に腹が立つのはいつものことで、お前は僕の機嫌を損ねた事に気づき、デリカシーゼロの言葉で謝罪する。そしていつも、同じ言葉で締めくくると。

『目の色だけは似てる』

そういう話をするのは、お前が自分と話すとき。お前は、今はもうない世界の中に行つてしまふから、僕は置いてけぼりの気持ちになつて、お前を懸命に呼び戻す。

悔しいし、寂しい。それ以上に恋しい。

お前がそんなに好きだった僕の親は、どんな人だったんだろう、って。

お前が死んで、二つのものを手に入れた。押し付けられた、という方が正しい。お前の目と、銀の鎖のペンダント。

——僕に渡して。

遺言。

確かに、お前がいるうちはお前に渡すことは不可能だ。だから僕にそれを頼むのは理に適っている。お前の顔を知っているのは、この世界に二人だけなんだから。

僕と、スレイン。

同い年のはずだ。十四歳。イナホが自分と話すとき、いつもそこにキミがいた。

マトリクスの液晶パネルをタッチする。簡単に扉が開く。僕の手とお前の目は、全ての扉を開くことが出来る。



お前がそう改造したからだ。な、イナホ。

「親ばか」
過保護なんだよ。僕にさ。

箱庭には、何度も来たことがある。暇だったし、お前はどちらかと言うとそれに賛成だったよな。「あまり遅くならないように」と手を振っていたくらいだから。

お前の話す地球の、新葦原という場所がそこにはあった。夕刻の並木道を歩く。今日は冬の設定だ。体感温度は肌寒いくらいだが、雪がちらちら降っている。イルミネーションが凝っていて、デートにはもってこいのロケーション。その通り、多くの番が街中に観察された。現在一〇二組が生殖可能だ。歩道で、カフェで、ベンチで。愛を深める彼らの姿を歩きながら観察する。

お前はスレインと、こんな風にデートしたことあったのかな。

「え？ わっ」

唐突に目の前がチカチカして、思考停止。数秒後、僕は自分が転んだのだとわかった。初めてのことには驚き、その場に座り込み原因を分析。あれだ。歩道の模様タイル。急にパターンが変化したから、認識機能が誤作動を起こしたのだ。

「大丈夫ですか？」

声をかけられ、手が見えた。手のひらを上にした白い男性の手。意図を探る。立ち上がるのを手伝おうとしているらしい。番でもないのに、お人好しだな、と僕は手を見て考える。

「あの？」

柔らかい声が少しお前に似ていたから、驚いて顔を見た。それで僕はまた驚く。

「あ……」

男性も目を丸くして、手を差しだしたままの姿勢でぼかんと口を開けた。プラチナブロンドの髪をした、同い年くらいの少年。首にはプロテクターが嵌っていた。

目を奪われたのは、その瞳。鏡のように映り込む僕が、僕と同じ虹彩の中にいた。

……いた、んだ。ちゃんと。

差し出された手を信じられない思いで握る。僕より大きくて硬い手だ。立ってみると、身長も高い。動悸がする。喉が渇く。思考は遠心分離機にかけられたみたいに、脈絡なくばらばらだ。

「……どこかで、お会いしたことありませんか？」

少年が控えめな声で聞く。僕は慌てて首を振る。

「……いや。初対面」

嘘ではない。知っていたけど、初めて会った。「キミ、一人？」

僕は聞く。会えたらいいな、とは思っていたし探すつもりも少しはあった。でもまさか、本当に会えるとは思っていなかった。少年は眉尻を下げた微笑みを浮かべる。

「はい。僕は、まだ番が小さいので」

生まれたばかりで会えるのはまだ先です、と肩を竦める。

「そうなんだ」

一瞬、彼に何もかもを話してしまおうかと思つた。箱庭や、方舟や、地球や鳥や、お前のこと。お前の話した彼のこと。

でも。

「名前を覚えて」

僕が言えたのはそれだけ。

「オメガエステイワンです」

「そうじゃなくて。キミの名前」

キミは笑つた。ああ、確かに、と僕は思う。

「スレインです。スレイン・トロイヤード」

この人が、スレイン。僕はお前の言葉の全てを思い出す。

口を開く。メッセンジャーの心地で。

「雨みたいな名前だね」

雨がそんなに好きなのか、と僕が聞く度、お前は言つたな。雨じゃなくて、僕が好きなのはスレインなんだって。

「そうですか？ 初めて言われました」

スレインはくすぐったそうに肩を竦める。

こういう仕草をお前は何度も見たんだろうな。独り言の中で。

「じゃあね、スレイン」

手を振ると、彼の手が引き留めた。

「あ、君の名前は？」

僕の手首を掴む右手に、製造番号の印字が見えて切なくなる。ああ、キミが二〇歳の頃、

α・IK・1 は六歳だ。生まれた意味ってなんだろう、と柄にもないことを考える。その問いは、そっくり僕にも跳ね返るんだ。

——設計ミスだよ、神様。

全てを飲み込み、僕は彼の手を離す。

「僕、名前ないんだ」

スレインは困った顔になる。そんな顔をさせたいわげじゃない。このままでは後味が悪いし、何か言わないと。えっと。そうだ。

「キミが考えてよ、僕の名前。次に会う時まで」

え、とスレインが目を見開く。

「僕でいいんですか？」

そんな大事なこと、と口籠る彼に微笑む。うまく笑えたかはわかんないけど。

「キミしかないよ」

僕の名前をつけるのは、この世界に二人だけ。一人は、最期までつけてくれなかったから。

「かっこいいのにしてよね」

「……わかりました。頑張って考えます」

笑顔で別れる。生まれて初めて、約束をした。

「お前の言う通りだった。イ・ナ・ホ！」

箱庭の出口に向けて歩みを進め、僕はヴァーシャルの空を見上げる。腹が立つほど悔しいけれど。

「確かに、全然似てないぜ」

あとがき

この本をお手に取っていただきありがとうございます。

手にした本はとりあえずあとがきから読むという人類が一定数存在しますが、今ここをお読みになっている方もしそうなら、本編小説をお読みになった後でこの本の内容に目を通していただけると嬉しいです。が、そのへんは個人の自由なのでご判断はおまかせいたします。

普段は本編軸の暗い伊奈スレや設定のふんわりとしたファンタジーパロを書くことが多いので、こういった正統派SFは不慣れですんごく大変でした。校正に使った紙は五五〇枚という、これまでで一番手間暇をかけたものになっています。そのおかげで、私にしてはスケールの大きな話になったのではないかと結構満足しています。設定が込み入っているけれど全てを書くと言明臭くなってしまし、あまり人数が増えると進行の妨げになる。好きだけこの設定は本に入れ

たら蛇足でしかない、などの理由で削らざるを得なかったネタがあり、もったいないので副読本としてまとめることにしました。

全てをご覧になった方ならばつきりつきり丸わかりかと思いますが、本編にちよろつとしか出てこない前のスレイン(Ω・ST・17)がドストライクに超好きです。クローン設定は私がよくやるネタの一つ(十八番)ですが、「童貞×処女初夜ってシチュを伊奈スレに一回くらいさせてあげたい」「特典で見たシヨタ帆の狂気が愛しい」「年下攻めの民だけど純情スレを三十路なほの大人の魅力で抱いてほしいときもある」などが理由です。

Ω・ST・17は二人の伊奈帆と出会うのにとちらとも番になれなかったオメガ(生涯童貞処女)というとんでもない激重設定を(私によって)付与されており、オメガバス設定ではそのへんの不憫さがたまらないわけですが、彼が頭の中にいたから本編で主役を張っている二人がデイス

ピアの中でも確かな幸せを感じて、それが本物だと言える裏付けになったような気がしています。

17 スレは5帆に甘やかされてのびのび育った設定なので、直情型で光属性強めです。身体を動かすのが好き（特に球技）で、カジュアルな服装を好んでいました。5帆は彼が小さい頃はスポーツに付き合っていました。5帆は彼が小さい頃は相手にならないな、と判断して見守り系になりました。二人ともチェスは好きだったみたいです。

17 スレは5帆から地球の話聞くのが好きでしたが、初めて聞かせてくれたのは11歳の頃でした。その後、12歳で5が回収に行つて（当日急に言われた）その時に方舟の仕組みについて全て聞きました。それで、もうこんなところにいるのかよ！って逃げようとしたんだけど、6帆が生まれたのが精神感応でわかつて戻っちゃったんですよ。前髪が長いのは6帆に表情を悟られないようにするためつてのと、あんまりよく見なくて済むようにです。自分を必要とする命がある、っていうのが彼の生きる意味だったので（聖

母）、6帆と暮らしている時は方舟のことも箱庭のことも地球のことも知っていてさえ、ちゃんと幸せでした。スレインが20歳で回収されるってことを6帆は知っていたけれど、この17スレは自分の年齢や誕生日を伏せていて閲覧制限もかけていたので6帆は17スレが回収された後で彼の誕生日（Ωにとつては命日でもある）と年齢を初めて知ったっていうしんどすぎる裏話があります。シヨタ帆の闇落ちはそのへんがトリガーです。急だったから。シヨタおに二人のドタバタギャグも脳内にはあったのですが、二人の結末があまりにも悲しくて具現化できませんでした。誰か代わりにお願いします。

主役の二人に関しては、他の伊奈スレの個性が強いので最初は大丈夫かな、と思っていました。書いているうちに大好きになれて良かったです。特にこの18スレは原作スレや17スレより闇は深いし精神崩壊起こしてるし肝心なこと言わないしで、なんかもうすごい面倒くさい彼女感があり相当に手を焼きましたが、7帆がマイペースか

つ底抜けにいいやつだったのでなんとかかなりました。7帆と出会う前の18スレは原作最終話くらいやさぐれていて、あちこち忍び込んで色々破壊していました。逃げられないんだ、と悟ってからは自ら回収されようかと絶望したものの、7帆に会ってからでもいいか、と先延ばしにしています。駅のホームで会った瞬間「会えてよかった。生きていてよかった」って思えたから、伊奈帆のオメガとして20歳まで生きることになりました。7帆に愛されるように、18スレはメンヘラヤンキーを封印して、きれいで可愛くて優しいふりをすることにしたんですね。そんなところが健気でかわいい。7帆の方は純情理系少年な上、スレインが視界に入った瞬間に一目惚れしていますので、18スレがネガティブ発言で絡んできても「そんなところも、いや、そんなところが好きなんだ。僕の方こそ気付けなくてごめん」って変換されるので幸せカップルです。

原作軸の二人に関しては、もうこれを書きたかった、我が人生に一片の悔いなし、って感じですよ。

逃避行中に身籠っていて、伊奈帆は全ての後にそれを知りました。「だから、またな、って言ったんだ。だから逃げてくれたんだ」と我が子のために方舟の破壊（！）を思いとどまります。スレインは20歳で、伊奈帆は左眼の使い過ぎのため34歳で亡くなりますが、心が確かに繋がっていたし、ほんのわずかな時間でも隣に立って夢に手を伸ばすことが出来た。二人は幸せだったと思います。

こんなところまでお付き合いいただきありがとうございます。またお会いできますように。

奥付

楽園の暇-Eden's Cage-Secondary reading book

発行 Scramble/鳴海

発行日 2023.11.12/ZERO の方舟 15

印刷所 (株)しまや出版様

Mail jjncg720@yahoo.co.jp

Twitter @narumiblue

PixivID 955950

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。
無断転載、ネットオークションへの出品などはお控えください。